

公開講演会記録

梁啓超と近現代の中国

——和製漢語の中国への輸入

香港衛星テレビ東京支局長

李海



1. なぜ梁啓超に注目したか？

多くの日本人にとって、近現代の中国人の中でよく知られた人物を挙げるなら、孫文、蔣介石、毛沢東、周恩来、魯迅くらいだろう。梁啓超はなじみが薄いかもしれないが、中国の人々にとってはビッグネームである。特に中国近代史、現代史を研究する者にとっては、避けては通れない人物である。梁啓超は中国の教科書にも出てくる有名な人で、ほとんどの中国人が名前を知っているとんでも過言ではない。元々、大学で法律を勉強していた筆者も、直ちに梁啓超に注目したわけではない。日本の法律用語の多くは漢字で書かれ、難解である。中国語と対照して理解しようと思ったところ、何

と、中国語でも全く同じ言葉が使われていた。例えば、国際私法に「反致」という言葉があり、漢字を見てもなかなか理解できない。そのまま中国語にもなっているので、調べたところ、日本人が発明した言葉で、その意味は、涉外的私法関係において、準拠法を定める際、法廷地の国際私法の規定だけでなく、外国の国際私法の規定も考慮した上で、準拠法を定めることを「反致」という。この経験をきっかけに、言語における日中の交流を調べたところ、近代中国語の学術用語から一般の用語まで、おびただしい数の用語は実は日本人によって作られたことが分かった。いつの時代に誰によって中国に導入されたのかを究明するため、近代日中知識人の交流史を学んだ結果、和製漢語を中国に導入した最大の功労者は

2、梁啓超はどのようにして、和製漢語を中国に広めたのか？

梁啓超であるという結論に至った。

梁啓超と和製漢語の関係を語る前に、中国語における和製漢語の立ち位置について考えてみたい。われわれが日常的に使用している基本的な術語の多くは日本で作られたものである。例えば、組織、規律、政治、革命、理論、原則、哲学、経済、科学、幹部、社会主義、資本、法律、封建、共和、文学、抽象など、人文・社会科学方面の術語の70%は日本由来と指摘する学者もいる。これは中国で話題になり、多くの中国人にとっては初耳で、衝撃を受けた人も少なくなかった。今日、和製漢語は中国人が気付かないほど中国

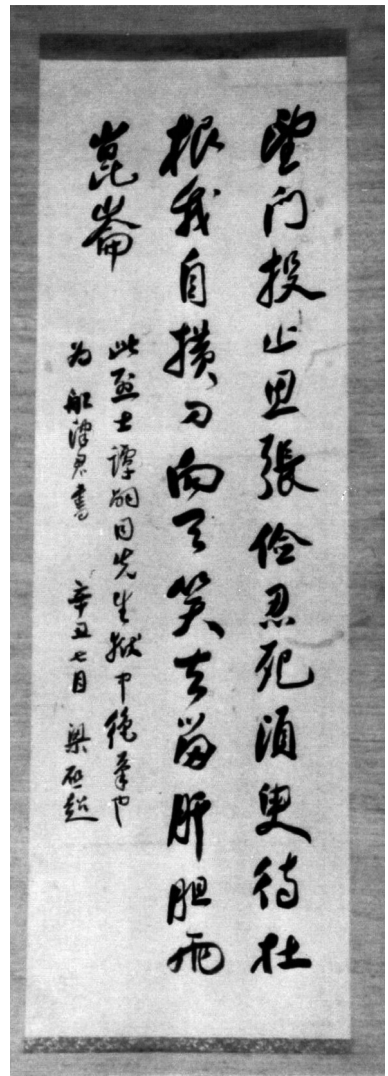
での地位を固めたのである。そこで、ここでは、和製漢語の導入に関して、その役目を果たしたのがなぜ梁啓超だったかを考えてみたい。



日本に亡命する前の辮髪姿の
梁啓超 (1873~1929)

梁啓超の師である康有為は日本の明治維新を手本に変法活動に精力的に動いた。変法は西太后を首領とした既得権益層の利益を害したため、弾圧された。梁啓超は伊藤博文の助けで日本への亡命を余儀なくされ、再起を図った。日本に渡った梁は、新たな天地を得た。それは日本の開かれた言論・学問で、これを中国に伝え、下から上への啓蒙活動に力を注いだ。日本に来て、日本人の協力を得て東亜商業学校を作り、中国の未来の指導者を育てたわけである。その学校には日本の錚々たる面々がいて、例えば、学長は犬養毅、

◀ 梁啓超が東亜商業学校の日本語教師船津輪助氏に贈った書道作品



教師の中には早稲田大学三代目総長の天野為之もいたし、一橋大学の総長も務めた同じく経済学者の松崎蔵之助は、梁啓超が創設した中国人留学生教育機関で教えた。これらのことが梁啓超の日本の亡命生活に大きな支えとなったわけである。

梁啓超は、日本に亡命する前からすでに、日本が西洋經由で知識を吸収していた点に注目し、中国への西洋文化の導入に目覚めた。その当時、中国でも西洋の科学技術、社会科学に注目した人がいなかったわけではない。中国は日本より早い段階で西洋の科学技術、人文知識に目を向けていた。例えば、魏源の『海国図志』は日本でも重宝され、日本の歴史的進路にも大きく影響した。魏源は『海国図志』

の中で「夷の長技を師とし、以て夷を制す」と述べ、外国の先進技術を学ぶ必要性に言及していた。清国のアヘン戦争での敗戦に危機感を募らせた当時の日本では、吉田松陰、佐久間象山らにこの本が読まれ、速やかな体制転換の必要性の認識が日本国内に広まるきっかけとなった。

嚴復の『天演論』（進化と倫理）、『原富』（国富論）は中国の知識層に大きな影響を与えた。これらの書籍を中国語に訳し、紹介する際には、西洋的な概念が中国語に存在しない場合は、新たな概念を創出するしかない。嚴復は自力で新しい言葉を作り出すことを試みた。いくつか彼が翻訳し、発明した単語で、後に使われなくなり、死語になった例を挙げて

みよう。philosophy (哲学)を「智学」、economy (経済)を「計学」、society (社会)を「群学」と翻訳した。嚴復の見解では、日本人はeconomyを「経済」と訳し、中国人は「理財」と訳したが、「経済」の意味する範囲は広すぎ、「理財」は狭すぎるため、「計学」と訳したのである。今日の中国でも「理財商品」などの言葉で「理財」は普通に使われている。日本人が訳した「経済」は今日の中国でも普通に使われているが、「計学」は死語になった。

次は「天演」と「進化」(evolution)。「進化」と言えば常に他の種より高級で、さらに良い方向へ変わっていく変化のことと思いがちだが、進化はますます複雑になっていて、「進化」の反対語は「退化」だと理解しても不思議ではない。しかし、現代の生物学者は「進化」には方向性がなく、計画も目標もないと考える。進化の過程の中には複雑な現象があるものの、あまり変化しないものもあり、すべて天の選択と言っている、と嚴復はその時代にすでに考えていた。実際、今日、この「進化」の言葉は様々な誤解を生じてきたわけである。嚴復の訳の「天演」は人為的な方向性などの意味合いがなく、

イデオロギー的なものでもなかった。「天演」は死語になったが、その学問への真摯な姿勢は評価できるだろう。言葉には魔力があり、「進化」の大義名分で侵略戦争にまで踏み入った。このような教訓も銘記すべきではないだろうか。今でも、日本には似たようなイデオロギーを感じる言葉使いがあり、外国人の視点から指摘しておきたい。「国際開発」「アジア開発銀行」とは、日本が先進国として後進国を指導する立場であり、少なくとも言葉の意味の上では、支援を受ける国としてはいい気持ちはしないだろう。この現象は梁啓超の時代からすでに見られ、当時、日本の関係者は盛んに「保全支那」を言っていて、やはり上から目線であるから、中国知識人の反発を受けやすい。

他に、「形而上学」は嚴復の訳では「玄学」「資本」は「母財」となっている。これらは残念ながらあまり使われず、死語になっていった。嚴復の訳はひとつも残されていないのか？そうでもなかった。例えば、logicは「邏輯」と訳され、今も使用されている。彼の翻訳の信念は「信・達・雅」だった。「信」は意味として信頼されること、忠実さ。「達」は原文の言わんとするところを完全に伝達す

ること。「雅」は原文の格調をも訳文に備えることである。発音、意味、格調の全てを兼ね備えるのは至難の業で、それが実現できれば間違いない後世に残る。ちなみに、日本語ではこれにカタカナの「ロジック」と漢字語の「論理」を当てている。他に、嚴復はUTOPIA (ユートピア、理想郷)を「烏托邦」と訳した。この訳の素晴らしさに相当するのはCLUBの訳である。漢字では「倶楽部」とも表記されるが、一緒に居て楽しいところの意味であり、完璧と言っているだろう。似ているものでは、中国語ではCOCACOLAが「可口可樂」と訳され、これも優れた翻訳例である。

言葉は生き物であるから、現在でも日中間では言葉の交流が盛んに行われており、例えば、「人脈」は日本人が発明した言葉である。その発明者は毎日新聞の関係者で、その発明の経緯を聞いたことがある。約40年前、『広辞苑』の「脈」という字の解釈の箇所が目が留まった。辞書には「山脈」や「水脈」があるのだから、「人脈」があってもいいじゃないかとひらめき、この造語を作った。これは中国でも普通に使用されている。その他、日本の時代現象を反映した言葉

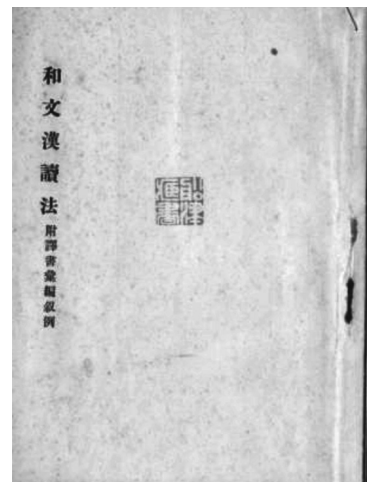
が、中国でも意味が通じるようになり、中国語としても定着していったりする。例えば、宅男、宅女、孤独死、暴走族など。逆に中国語からも日本に定着した例がある。それは、日本でも話題になっている、おなじみの「特区」の言葉で、これは中国での造語である。

嚴復の翻訳の話を戻ると、嚴復は当時、中国一流の知識人だったが、これらの翻訳は学術的には全く問題がないのに、なぜ世に広まらなかったのか？ 嚴復は学者であるから、その影響力は学者の世界にしか及ばず、世に広く知られるようになるには、新聞雑誌の力が必須である。当時は新聞・雑誌が最も影響力を持つ最先端メディアだった。似た現象では、3年前、フランスの経済学者ピケティの話題の著書『21世紀の資本』が日本でも発売された。日本語訳は728ページにも及ぶ煉瓦のような厚さの本である。この影響力もやはり学者の世界に留まると予想される。

梁啓超は小説の力を借り、小説を用いて、民を啓蒙した。この「小説」という単語も日本で新たな意味を賦与された言葉である。戊戌変法の失敗後、梁啓超は

伊藤博文の助けを得て、日本に亡命した。日本の軍艦・大島号の艦上で、艦長から日本の作家、柴四郎の『佳人之奇遇』を受け取り、興味津々に読んだという。『佳人之奇遇』は日本の小説ではあるものの、章回体で書かれ、漢詩がそのまま掲載されており、しかも漢字・漢語を多用し、梁啓超にとっては読みやすいものだった。梁啓超が日本語の訓読みのルールをまとめた著書は、日本語の入門書として重宝された。

その後、日本に到着して横浜の中華街に定住し、新聞雑誌を発行した。その中で、『清議報』に『佳人之奇遇』の中国語版を掲載した。『清議報』の創刊号には「譯印政治小説序」を発表した。小説の地位も梁啓超によって高められたと言っている。ご存じのように、中国の四大名著『紅樓夢』『三國演義』『西遊記』『水滸傳』の著者は、いずれも、科挙試験に失敗してから失意のうちに小説を書くようになったわけで、小説は明清時代までは地位が低く、正統な文人には無視されていた。梁啓超は日本に来てから、小説に啓蒙の役割があるのを発見したが、その一番有名な例が『佳人之奇遇』だった。それからすぐ、「譯印政治小説序」と「論



希観書である『和文漢讀法』

小説與群治之關係」の論説文を発表し、このうち前者では、「彼の米、英、独、仏、奥、伊、日本各国の政界が日に日に進歩するにおいては、政治小説の功績が最も高い」と記した。梁啓超はそれとは対照的な中国の小説の問題点を指摘し、後者の「論小説與群治之關係」では、「我が中国人の状元宰相の思想、我が中国人の才子佳人の思想、我が中国人の江湖盜賊の思想、我が中国人の妖巫狐鬼の思想はすべて旧小説の影響によったもの」と指摘し、「旧小説は中国の社会腐敗の根源である」と批判して新小説を提唱した。

上に挙げた中国の4大名著は日本でも名高いが、そのスケールの大きさ、奇妙幻想の世界、義侠人情の世界には、いずれも日本の読者からは驚嘆の声が聞かれる。ただし、その害について検討する人

は滅多にいない。梁啓超の言う通り、中国人の心性に害毒となった面も確かに中国の古典小説にはある。『三国演義』では英雄論を語り、みんなが英雄になりたがるが、現実には中国人の企業家が日本より多くなり、治国平天下の志を持つのも悪いことではなく、地道・平凡は中国では評価されなかった。『紅樓夢』の人間関係もあまりにも複雑で、日本では他の三つの小説より人気は一段と落ちるが、その原因も『紅樓夢』で語られる中国式の人間関係の複雑さに起因している。『西遊記』では幻想的な世界に夢を託し、現実世界からの逃避の側面は否定できない。『水滸傳』も盜賊を英雄に仕立て上げ、殺氣溢れる小説である。和解的な社会にはふさわしくない。ゆえに、中国では若い頃は『水滸傳』を読まず、年老いたら『三国演義』は読まない、ということとわざさえあった。おそらく、若者は血氣盛んで、『水滸傳』を読んだら、非行に走る可能性が大であり、老人はすでに人間社会での経験が豊かで、その上さらに『三国演義』を読んだら、老獪になり、人に嫌われるだろう。

1902年、梁啓超は『新小説』創刊号の「論小説與群治之關係」の冒頭でこ

う述べた。「一国の國民を一新するには、まずこの国の小説の革新が必要である。だから道徳を革新しようとするには小説の革新が、宗教を革新しようとするには小説の革新が、政治を革新しようとするには小説の革新が、風俗を革新しようとするには小説の革新が、学芸を革新しようとするには小説の革新が必要である。そして人心を革新しようとするにも、小説の革新が必要である」。小説の地位をこれまでにはない高さにまで持ち上げたのである。彼は日本の政治小説『佳人之奇遇』『経国美談』を中国語に訳し、自分が主筆を務める『清議報』に掲載した。小説を通じて、民主、政治、経済、自由、法律、美学を全て中国の読者に伝えた。梁が重要な役割を果たしたのはもちろんだが、梁だけでなく、多くの留學生が日本の教材を中国語に訳し、社会問題にもなった。

3、梁啓超の影響力と和製漢語の伝播

梁啓超の影響力はどれほど大きいのか？ こんな評価がある。中国近代史の人物で梁啓超の影響を受けなかった人はいない。例えば、毛沢東はかつて、こんなペンネームがあった。「学任」、つまり、「任公に学

ぶ」のことで、任公は梁啓超の字である。

周作人は中国における日本文学の権威的な存在である。日記に次のように記し、梁啓超の著作に魅了されていたことが見てとれる。「夜、同窓黃君明から六月出版した『新民叢報』第十一号を借り、これを読んだ。中には、良い本が甚だ多い、すべて飲氷子（梁啓超のこと）が著したものである。夜中まで読み、就寝に忍びない。いいぞ、いいぞ。私は仰ぎ慕わせる。（1902年7月3日記す）」。

「午前『飲氷室詩話尺牘』を写し、『新羅馬伝奇』『新民説』などを摘録する。（1902年7月4日記す）」。「夜、『自由書』一冊を借り、読んで、立派なものが枚挙にいとまない。四更（午前1時から3時ごろ）まで、半分を読んだ：（1902年7月4日記す）」。李景彬『周作人評析』陝西人民出版社、1986年、pp. 21-22。

梁啓超の絶大な影響力の下で和製漢語の中国での普及は加速されたが、そもそも和製漢語は完璧なのか？ 答えは否である。いくつかの問題点がある。まず、和製漢語はいくつかのカテゴリーに分類でき、一様に日本人が作ったと断定するの

は間違いである。それが日本人による新規の創作であるかを区別する必要がある。和製漢語は以下の3種類に分類できる。

1、中国が直接西洋から学んだもの。

実は中国の西洋文化への接触は日本より早く、7世紀にはキリスト教の聖職者が中国で布教しているし、13世紀のマルコポーロ、16世紀のマテオリッチと、中国の学者が翻訳した西洋書が日本にも紹介され、そのうちの術語、例えば、数学、理論、銀行、保険、批評、電気はこのカテゴリーである。これは和製漢語には含まない。つまり、西洋の概念を漢語で表現する上で、どれを日本人が作り、どれを中国人が作ったか、その源流を探ることが学者にとっては地道な仕事になる。

2、漢字語彙の元来の意味に新たな意味を付したもの。

これが一番多い。例えば、革命、芸術、文明、文学、封建、階級、国家、民主、自由、経済、社会など。日本人は漢語の元々の意味を加工した。その加工の手法はいくつかあるが、まず意味を抽象化し、その次に拡大もしくは縮小する。例えば、拡大の例は「階級」という単語。これは、元々の漢語では、官位の俸給の高さ・低

さを意味していた。日本の学者は「階級」を西洋語“Class”の対応語として翻訳に使用し、その際、元来の意味を抽象化し、拡大したのである。縮小の例では、例えば「文学」が挙げられる。元々の意味は非常に広く、文字形態の書籍文献は全て「文学」と呼ばれ、漢・唐の時代には、「文学」は官職の名称にもなっていた。日本の学者は“Literature”を翻訳する際に「文学」を用い、元来の意味を縮小したのである。

3、日本人が新たに作った単語。

例えば、個人、民族、宗教、科学、哲学、美学など。上の2のように、中国の古典から借りてすぐ使えるのは便利だが、その弱点として、元来の意味と混同しないかどうかの問題がある。例えば、中国人の「革命」へのイメージはもともと政権を倒すことを指しており、非常に重たい言葉だが、日本では何にでも「革命」を用いたがる。その背景には、おそらく日本人の歴史の中では、中国の歴史のような革命を経験してこなかったからだと、思われる。洗濯革命、掃除革命のように、日本人は「革命」の語に対して甘い感じがする。たぶん「革新」と言ったほうが良い。

現代はどうだろう。総じて和製漢語の勢いはない。時代が要請する新しい概念や単語はあまりにも多く、外来語を借りる場合に、新しく作り出すのも手間がかかるため、全部カタカナにしている。昔、明治時代には、現代と比べ、カタカナ語は少なかったが、これからカタカナ語の比率はますます増えるに違いない。例えば、外国人にとっては、同じことをカタカナ語で表し、ややこしくなる場合もある。空間をスペース、科学をサイエンス、経済をエコノミーなど。

4、梁啓超と現代中国

最後に、梁啓超の現代中国における意義について検討したい。彼は予言者でもあって、百年後、人々は必ず自分のことを思い出すだろうと言っている。彼が百年前に政治小説『新中国未来記』の中で予言した万国博覧会は、1962年に上海で開催される形での中した。確かに、百年後の今日、私たちは梁啓超と深く関わっており、中国の今日の政治経済のキーワードも彼が関係している。例えば、「中華民族」という言葉は梁啓超が発明したのである。これは、1902年、梁啓超が『論中国學術思想變遷之大勢』と

いう文章の中で使い始めた概念である。その中で、歴史の軸に重点を置きながら、中国の民族の多元性を分析し、「中華民族は最初から一族ではなく、実に多民族から混合してできたのである」との結論を下した。中華民族の概念を打ち出すとすぐに社会に大きな反響を呼んだ。日本の中国人留学生らが作った新聞雑誌、例えば『浙江潮』『民報』『国民報』『江蘇』などにおいて、民族主義や中華民族の概念・意味について討論が行われた。この中華民族概念は、近代中国の民族主義の形成と国家建設の動きの中で、中国人を団結させる効果を發揮していた。国歌「義勇軍進行曲」の歌詞にも描かれているように、中華民族が最も危険に瀕した時代に、梁は中華民族という単語を発明したが、実は「華夏民族」という同義の言葉も発明していた。その後、梁自身が中華民族の語を多用したことや、楊度、章炳麟などの有名人も頻繁に使用したことから、中華民族の概念が固定化された。今日に至って、習近平総書記は中華民族の偉大なる復興を目指している。

また、今日、「一带一路」がホットな言葉になっている。一带一路に対し、日本のメディアは猜疑的だが、歴史の視点

から見れば、それは決して机上の空論ではない。陸のシルクロードと海のシルクロードは中国の強盛、文化の海外への伝播、外国との交流の実例である。梁啓超は文章の中で、張騫、班超が西域（現在の中央アジア、西アジア地域）を渡り歩いた歴史の壮挙を文章に綴り、中国の内政外交が緊迫した当時の時代状況の中で、梁は祖国の強大化という目的意識を抱き、祖国の歴史の栄光を再び遡ろうという夢を人々に与えたのである。歴史上の西漢は国力は強盛であり、外交は内政の延長であり、弱い国には外交なしで、安定して強くなれば外交ができる、とされていた。

1904年、梁啓超は「祖国大航海家鄭和伝」という文章の中でこう語った。「コロンブスのあとには、無数のコロンブスがあり、ダガマのあとには、無数のダガマがあり、しかし、わが鄭和のあとには、鄭和がいない」。これはまさしく、ジャーナリストの先見の明と言ってよからう。また、問題点も鋭く指摘していた。「一带一路」は中国の知識人による中華民族の偉大なる復興の戦略的なビジョンである。改革開放と同じように、これは中国の発展途上での重要な選択であり、

その選択を歴史の視点で見ても、中国の知識人が百年前にすでに考えていたのであって、この視点からの「一带一路」の理解も可能である。梁啓超が近現代の中国史に果たした役割の大きさを日本の皆さんに披露し、その一端である和製漢語の中国への導入の事実を紹介できたならば幸いに思う次第である。

（2017年6月15日・アジア研究懇話会）

筆者略歴（リ ハイ）

1982年中国四川省生まれ。香港衛星テレビ東京支局長、名古屋大学文学博士。一般財団法人アジア・ユーラシア総合研究所運営委員、一般社団法人安保政策研究会研究員、客観日本コラムニスト。日本の出来事を中国に報道するかたわら、教育・文化に関心を持つ。

著書に『日本亡命期の梁啓超』（桜美林大学北東アジア総合研究所、2014年）、訳書に『日本如何面對歴史』（人民出版社、2014年）、監訳に『融冰之旅——日本原政要北大演講錄』（人民出版社、2015年）、『王蒙先生「論語」を語る（抄訳版）天下仁に帰す』（アジア・ユーラシア総合研究所、2017年）などがある。